

Title	タイ国での護符信仰の意味 : その消費社会での効用
Author(s)	石高, 真吾
Citation	年報人間科学. 19 P.233-P.247
Issue Date	1998
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/6088
DOI	10.18910/6088
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

タイ国での護符信仰の意味

——その消費社会での効用——

〈要旨〉

タイ社会においてはワトゥ・モンコン (Watu Mongkhon, Watu 物質, Mongkhon 吉祥) と総称される護符への信仰が盛んである。本稿ではなぜワトゥ・モンコンが崇拜されるのかについて宗教的な枠組みに加えて社会的な枠組みからも検討する。まず、ワトゥ・モンコンの護符としての効力の源は原料及びそれを聖化する聖化儀礼に依存する。ここで注目しなければならないのは両者とも、上座部仏教のサクシット (Sakait 聖性) にその効力を由来している点である。そして、消費社会 (俗界) においては、ヒエラルキカルに上部に位置する聖界側から下げ渡された、ワトゥ・モンコンはサクシットを源として所有者にブルデューの主張する「デイスタンクシオン (distinction 卓越性、卓越化)」を与える「文化資本 (capital cultural)」という性格を有している。ワトゥ・モンコンはサクシットを有する、モノであるがゆえに、消費社会で人々に、モンコンをもたらすマテリアルとして作用しているのである。

キーワード

タイ
ワトゥ・モンコン (護符)
ブルデュー
文化資本
デイスタンクシオン

石高 真吾

I タイ社会での護符信仰をめぐる状況

タイ国ではたとえあなたが短期の旅行者であっても、もし注意深ければ、小さな仏像のようなものを人々が首の金のネックレスにぶら下げているのに気付くであろう。これは、ファッションではなく、護符のカテゴリのひとつでワトゥ・モンコン (watu mong-khon) とよばれる (watu は物質、mongkhon は吉祥という意味である)。所謂「お守り」は、一般に紙に書かれた「呪符」であり、その効用は期間限定のものであり、年が変わると神社や寺に奉納しなければならぬが、ワトゥ・モンコンはその効用が永続すると考えられている点で異なっている。さらに、そのマテリアルな側面からも興味深い点がある。それは、素材が様々であり、一般に耐久性に富むものが多い点である。金属、プラスチック、粘土、土、鉱物などである。もっとも、紙(ラマ五世の切手や高僧の写真)もあるが、これらは通常その携帯の便を考えてグループ (group) と呼ばれるプラスチックの枠に入れられているため耐久性は問題ない。そしてこのマテリアルとしての耐久性がある故に、ワトゥ・モンコンは、タイ国では流通し、よって単なる護符としての機能を超えて、新たな機能が付加されていっている。本稿では護符の機能について、消費社会というコンテクストのなかで語っていききたい。

II その宗教的な意味付け

(サクシット sakset 聖性) の生成過程

II-1 護符の効力の源

ワトゥ・モンコンが護符として効力を有するには聖化儀礼を経ることが重要である。聖化儀礼はタイではプッタ・ピセーク (phuttha phisek) 又はブルックセーク (phukseak) と呼ばれる。

護符を造る場合にはブラ・ピム (pha phim、型押しされた小仏像) の場合、まず材料と雌型が必要である。材料は前述したように、様々なものがあるが、一般によく見受けられるのは、漆喰、金属といった、加工しやすいものである。さらに経文の知識、コーム (khom、クメール語によるパーリ語経文の音訳) やヤン (yan、神秘的なチカラを持つとされる模様) という神秘的な領域の知識が必要なのは言うまでもない。それ故に、その造り手は、大部分は年配の僧が多いようである。また、ターウィルによるとブラ・ピムを造る際には、原料の中にその僧院の古い手書きの経文を焼いて得た灰を入れるという^③。この理由は後に章を改めて述べるつもりであるが、手書きの経文に宿っていると考えられている経の力、あるいは別のアスペクトからみると仏教という大伝統からの権威を、伝達するためではないかと考えられよう。

しかし、護符の価値はその外観的なもの或いは換言すれば可視的な面よりも、以下に述べるような内包される、たましいにより重点

を置かれているといつてよいであろう。護符の価値は、外からの災害が及ばずにすむように予防する、或いは災厄に襲われたときにその原因を取りのぞく、または幸運をもたらすと考えられている点にあるためその源として護符のなかにたましいがあることが要求されるのである。よって護符の力を強化する儀式が必要とされるのである。護符の聖化儀礼は、タンバイアも述べているように仏像の開眼供養と等しい。現にタンバイアも以下のように報告している。

実際ワットで、ある仏像が聖化されているとき衆生（と僧侶たち）は新たに購入したり、铸られたりした小さな塑像とお気に入りの護符をそれらもまた聖化儀礼を受けられるように持つてくることはありふれた光景である。（…中略…）僧侶たちによって法（Dhamma）を招聘され仏門に帰依する者として僧侶たちの徳とエネルギーを移行させることでブッダの「存在」が活動させられて初めてブッダは像の中に内在するようになるのである。^③

さらに、護符に内在する力を強めるものとしては自然的な力による場合がある。

11月の陰曆12月の満月の夜に開かれるローイクラトン祭りにはすべての川の水はご利益のある力で満たされるといふ。ローイクラトンの期間中の夜に川で水浴びをし、各々の家にある素焼きの瓶を川の水で一杯にすることはご利益があるのである。大変壮観な聖化儀

礼が1968年9月25日に行なわれていたときワット・サーンチャウのボート（Boat 注：寺の講堂）に稲妻が落ちた。僧達の数名が直ちに落雷で焦げた漆喰の破片を集めた。総括するとこのことでプラ・ピムの製造のための素晴らしい原料が出来るのである。^④

II-2 護符製作

以下では、タンバイアによる聖化儀礼のモノグラフをみていくことでそのプロセスの概観を提示したい。^⑤

まずは護符をつくる動機である。ワット（Wat、仏教寺院）が護符をつくらうとする場合には通常何らかの動機があるようである。とりわけその寺院の補修や或いは新たな建物、記念物の設立のためといった財政面の理由が主な動機である。

タンバイアが報告しているケースでは、バンコクの「ラック・ムアン Tak muang」の場合がこれにあたる。ラック・ムアンとは「首都の柱」という意味である。タイでは新しい町をつくるときにその町が永遠に栄えるように町の基礎の柱をつくるバラモン教由来の習わしがあり、その柱は円形で頭部が蓮の蕾になっているという。これは1782年のチャクリー朝開闢の時に建てられたものである。^⑥

ここには「現在多くの人々が参詣しているのだが、神社になっており、『チャオ・ポー (Sao Poo 尊父)』と呼ばれる人格神が祭られており、現在その管理はタイ国軍在郷軍人会に委ねられている」。

「1975年に彼らはラック・ムアンの柱とチャオ・ポーの護符を作って国を守るために負傷した兵士たちとその家族への見舞い金

を得るために売り出すことにした」。

次にその種類については「5人の守護神と柱自身のメダルの2種類が金メッキと鉄の2色で売られている。前者が30パーツで後者が20パーツである。更に銀製の柱の模型(約22号)が999パーツで売られた」。筆者の考えでは後者の模型はもちろん護符として身につけるのは不可能なので家や会社とその本物のミニチュアとしての護宅除災的な効能を持たせてあるのだと思われる。

以下からいよいよ護符の製作行程にはいる。「まずバンコクから108(縁起の良い数)の国中の重要且つ有名な僧の許に原料の金、銀、の延べ板が送られる。これは延べ板のそれぞれに各僧が聖なる文字を書き(キアン・アッカラ *khian akkhara*)その文字を書いていける間聖なることばを唱えてもらうためである(ブルック・セーク *pluksek*)」。それから延べ板が集められ溶かされてそれぞれのリアン(*fan*、メダル)やミニチュアになる。この過程については「プッタピセークと呼ばれる聖化儀礼の中心であり詳細は後述する。

最後に護符制作の締め括りとなるのはブルック・セークである。ブルック・セークとはブルック *pluk* 呼び起こす、セーク *sek* 呪文を唱えて息を吹き掛けるという意味である。これは、僧が護符を俗人に手渡すときに行なわれるものである。ラック・ムアンの場合「この儀式はプー・サンカラート(*phra sangkhat* 僧院組織の大僧正 [the supreme patriarch of sangha])が出席され政府からは首相の代理と国防大臣が出席した」のであるが、もし過去の高僧の護符が作られる場合、ブルック・セーク儀礼に出席する者は、そ

の逝去した高僧の門弟であることが普通である^①。

肉や蟹、卵、菓子、果物といった供物がラック・ムアンの神に捧げられてから聖化儀礼の中心的な儀礼が始まる。

「一方の側で4名の僧が絶え間なくパリッタ經文を唱えている間(スアット・パリット *suat parit*)72名の年配の僧が24名ずつの三組に別れて一回につき4時間静かに瞑想をして1本の糸を(サーイ・シン *sai sin*、引用者注…木綿で出来た糸)使って手から、護符が積まれている山に繋がれて僧達の徳を伝達する。僧達は座禅を組み目を閉じ集中し(サマーティ *smathi*)、經文を心の中で絶え間なく唱えるのである。僧達は“internal sitting”(ナン・ターン・ナイ *nan thang nai*)と呼ばれる状態に到達しており既にイッディ(*itti*、神秘的な力)の側面について議論しておいたようにそれは非日常的な神秘的な力に到達出来得るものである。一般的に信じられているところではカーター(*khathaa*)唱えて瞑想することで僧達は力(サクシット *sakst* 聖性)を集中出来、それを護符に伝達できるとされている」。

以上がラック・ムアンの護符制作のモノグラフである。

さらに護符を制作する上でのもう一つの重要な儀礼であるプッタ・ピセーク(*phutta phisek* 聖化儀礼)についてみていきたい。

これがなされる場所は「寺院の場合サーラー(*saalaa*)と呼ばれるお堂やポート(*boot*)と呼ばれる本堂所或いは個人の家の場合は中央の部屋で」行なわれる。この聖化儀礼で観察され得るものとして最も重要なもののうちの一つはサーイシン(*sai sin*)と呼ば

れる木綿の糸が聖化儀礼の執り行われている場所を囲い込み、同時に僧侶が経文を唱えている間中その糸を握っているという点にある。ここではサーイシンによって儀礼の場を日常から切り離し聖なる空間をつくる、一種の「境界」がみられる。またそのような象徴的な解釈のほかにも、視覚的な効果もあるのではなからうか。すなわち、或る空間を、特別視されている、視覚的にも白色で目立つ糸で区切ることで、その中から作り出される護符の効能や靈験あらたかさといった価値を更に高めると思われるのである。

更に「すでに入魂した仏像ともろもろの儀礼用品(クルアン・サッカーラ *khrueng sakkara*)」が置かれている。それらは「ジャスミンの花(ドーク・マリ *dook mali*)、線香、蠟燭、ご飯、ティアン・チャイ (*tian chai*) と呼ばれる蠟燭、プラ・ウィパシー (*pha wipatsi*) とよばれる蠟燭である。前者は主唱者の頭の大きさと同じ高さであり後者はその芯が28本の糸を撚ってある。そしてティアン・スアット・プッタピセーク (*tian suat phutta phisek* 聖化儀礼の経文の蠟燭) と呼ばれる蠟燭がある。これらは壇の上に供えられその後ろでは4名分の交互に経文を唱える僧侶の席が用意される。

サーイシンで区切られた外側にはテワダー (*thewadaa* 神) のための祭壇がつくられている。供物が儀礼の終わりと金属を溶かして雌型に注ぐ前になされる(ブーチャー・レーク *bunchaa loek*)。テワダーは「儀礼の吉兆さを確実なものにするために必須なものである」。

以上が儀礼の場所の外観である。以下では儀礼面についてそのプロセスをみていく。「まずティアン・チャイに火がともされそれが燃えている間中雌型に液体状の金が注がれる時まで僧達の詠唱が続く。聖化儀礼の経文(スアット・プッタピセーク *suat phutta phisek*) はスアット・チャヤントー *suat chayanto* と呼ばれる勝利の呪文が含まれ、それは釈迦の、敵と邪悪なる者に対する10の勝利を反復したものである」。このパリッタはダンマによる加護と祝福について述べたものである。パリッタとはパーリ語による経文であるが元々パーリ語は無文字言語であったためコーム (*khom*) と呼ばれるクメール語の文字を借用しているが、その内容は仏法の三法、即ち、仏、法(ブッダの教え)、僧の三つの守護力とブッダの魔に打ち克った神話からなる守護の呪文である。さらにこの護符を聖化するパリッタ自体も、カーターやスータ *suuta* (スートラ *sutra* 聖なる経) からなるスアット・モンコン (*suat mongkhon* 守護経文) である。

そして「像が整形され磨かれ仕上げられると僧はサマーティ (*samathi* 瞑想) をし、像が力を得るようにする(プラ・クラング *pha khang*)」。沈黙して集中する僧侶たち(ナン・ブロック *nan plok*) と絶え間なくパリッタを詠唱する僧侶たちのコントラストがあることは記述しておくべき点である。

最後の段階はプッタピセークに参加した僧侶のための饗応と贈物の贈呈である。そしてこの段階では像の開眼が象徴的に像の目を覆った蠟を拭き取ることで行なわれる。この儀式の間僧侶たちはスア

ット・タンマチャック (suat thammachak) という経を唱える。

II-3 護符が効力を有する由縁

以上、護符制作のプロセスを追ってきたわけであるがここで明らかに変わったように護符が力(サクシット *sak-sit*)を持つに到るにはパリッタ (*paritta*) と瞑想による僧侶自身の徳が重要な役割を帯びている。知覚可能な現象としてはパリッタを唱えることでその經の持つ力が護符に及ぶとされる。知覚不可能なものとしては僧侶の手の指に結び付けられたサーイシンからサクシットが伝達される。僧侶のサクシットは何に由来しているかといえ、シラ (*sa-lai*) またはシン (*sin* 戒律) に忠実であることは勿論、超自然的な力があるとされていることであろう。ここでは、護符を聖化する際にどうして経文が唱えられるのかということについて考えてみたい。儀礼におけることばの果たす役割についてリーチは以下のように述べている。

「原始社会において観察される儀礼はことばと行為の複合体である。(…)ことばと儀礼が別物であるということは当てはまらない。言葉の発話自体が一つの儀礼なのである」。(1966:407) (下線部引用者)^①

すなわちブルック・セーク (*puksak*) 儀礼あるいはプッタ・ピセーク (*phutta phisek*) 儀礼においても僧侶による経文を誦えることが瞑想による力の挿入という行為と並んで儀礼の中心を成しているのである。ここでは聖なることばとしてのパリッタについて考

えてみたい。

護符の聖化儀礼においてはパリッタはパーリ死語によるためにコミュニケーションの媒介物としての役割は担っていない。即ちここではことばは理解されるために発話されているのではないのである。ここではことばのもつ一種の言葉の存在が信じられているためにパーリ死語が用いられているのである。ではどうしてことばが神秘的な力をもつと考えられているのか。タンバイアは東北タイでの三種類の儀礼言語を例にしてことばのもつ呪力を考察している。このうちここで本論文に関連のあるものは僧侶による聖なることばと悪魔払いの場合である。僧侶による経文の誦経はその聖なることばとされているものがタンバイアも述べているように衆生には理解されないが聴かれることに意味があるのである。ここでは前述のようにことばは意思疎通の媒介としてよりも聖性を伝達するものとしての意味合いが強いと思われる。即ち、聖性の裏返しとしての仏教の權威のメタファーとしての言語があるのではないだろうか。そして仏教という大伝統の裏打ち故にパリッタには力が備わっていると考えられているのであろう。

一方、聖なることばについて青木は以下のようにその効果について述べている。

『タンブンの儀礼』の枠付け内における儀礼参加者の目的追求には、そこで発語されることばがパーリ語であり、その意味内容の伝達が、内容本来の物としては俗側に伝わらないという特徴がある

ために、一種のパラドックスがそこに生ずる。すなわち発語された同じことばが異なるレベルで受容されるのである。この異なるレベルでの受容作用が、おそらく『タンブンの儀礼』を理解するための、最大の重要点である。俗側にとつてその意味内容は明確には理解されないが、ブッダという絶対的な権威が、原初に創始した聖なることばであることに疑いはない。そのことばを僧が誦えるのを聴くことは、それを聴くことによつて祈願の成就が達成されるという強い期待を聴く側に喚起させるのである。(…)換言すれば、俗側にとつて、パリッタは理解するよりもあくまで尊崇すべきことばであるがゆえに、日常生活の合理追求とは異次元に属する強い願望達成の期待を喚び起こすのである。(傍点部ママ)^①

つまり青木によれば聖界側で発せられたパリッタの詠唱行為はパリッタ本来の意味である仏教教義、或いは三宝の守護力、ブッダがマールに打ち克つた神話なのに対し、俗側での受けとめ方は自らの願望を達成するありがたいことばという「私的な意味」なのである。この点で俗側の聖なることばの受容のしかたは非合理的である。しかし俗側からみれば、聖なることばの発語は上座部仏教という大伝統のコンテキスト内のもので、聖なることばが仏教の権威、或いはその聖性を纏っていると考えるのは自然であろう。

さらにタンバイアが挙げている例として悪魔払いにおける言語がある。ここでは呪文はカーターなのであるが、それは密かにナム・モン (nam mon) と呼ばれる聖水に唱えられる。このカーターは

シンハラ人のマントラのように秘密の智なのであり、カーターはスートラ、即ち聖なる経の一部である。ここでもカーターはその発語が向けられる相手はクライアントの体内の悪魔と、水といった物質である。タンバイアはここでは言語の象徴装置としての役割を強調しているようだが本稿ではことばの持つ力そのものについて考えた。祈禱師を悪魔に対してはブッダの名代としてみせることに呪文は一役を買っている。その背景には、呪文がブッダの聖性とオーバラップしていることにも注意する必要があるだろう。即ち大伝統としての仏教の宗教言語であるパリー死語で呪文が書かれているためである。そしてこの聖性を纏うことで祈禱師は悪魔よりも恐ろしく強力であるように見せることが出来るのである。そしてこの聖性、あるいはブッダの権威が物質にも向けられる。このブッダの権威を帯びた呪文を物質に対して吹き掛ける(ブルック・セーク)ことで、タンバイアの場合は水を、護符の場合は未だ、モノにすぎない物質に力を与えるのである。

以上でみてきたようにパリッタが聖性を持つということはM・モースもまた次のように述べていることで明らかであろう。即ち「(同様に)、宗教的性格を持つ神聖な文書がときによつては呪術的性格を持ちうる。バイブル、コーラン、ヴェーダ、三蔵のような聖典類は、人類の大部分に対してまじないを与えてきた」^②。あるいは「まじないは特殊な言葉でもって行なわれる。すなわち神々の言葉精霊の言葉、つまりは呪術の言葉である。(…)呪術においては、いずこにおいても古い表現や奇妙で不可解な言葉使いが追い求められる

のである」⁽¹⁴⁾。

さらに護符が効力を有する原因としては護符自身の材質に起因するものがある。たとえばプラ・ソムデット (Phra Somet) と呼ばれる、「護符の帝王」と考えられているプラ・クルアンは全部で73種類のタイプがあるのだが、最初にこの護符を聖化した、ソムデット・プラプッタジャン (Somet Phrattajan トー・プロムランシー To phromangsi あるいは通称ソムデット・トールソンデット) (西暦1788〜1872) は、バンコクのイントラウイハーン寺 (Wat Intrawihan) で造るプラ・ソムデットの成分を決めている⁽¹⁵⁾。それによれば、一、様々な灰、二、ソムデット・トールが鉢で集めたご飯、三、バナナ、四、花粉、五、石灰、七、万金丹である。中でも重要なのが一の灰である。この灰にはソムデット・トールの袈裟や、寺の本堂の蠟燭、ラック・ムアン (国の柱) と呼ばれる、各地方の守護となる大きな柱から削った粉。香木、宝石等が含まれ、それぞれ、聖性を有するものとして考えられているものばかりである。他のケースでは僧侶の遺骨、遺髪、古い護符を潰して作った粉、インドの仏教四大遺蹟の土などの聖性を有する物質を混ぜている。

III ワトゥ・モンコンの俗界での意味

III-1 聖と俗との交換体系

前章ではワトゥ・モンコンがいかにして護符としての「効力」を

付与されていくかについてみてきた。しかし護符信仰がタイ社会においては、社会の近代化、消費社会の地方への波及により更に増幅されていったと考えるので、護符信仰隆盛の理由が単に前章でみてきたような宗教研究の枠内で分析しても不十分と考えられる。ここではワトゥ・モンコンのマテリアルな意味に着目してその物質的な側面から護符信仰の俗界内での意味について考えてみたい。そこで、ピエール・ブルデューの「文化資本 (capital culturel)」の概念を使って護符の効力について説明してみたい。文化資本については以下のような簡単な定義があるので引用しておく。

「文化資本 *capital culturel* 広い意味での文化にかかわる有形・無形の所有物の総体を指す。具体的には、家庭環境や学校教育を通じて各個人のうちに蓄積されたもの、知識・教養・技能・趣味・感性など (身体化された文化資本)、書物・絵画・道具・機械のように、物質として所有可能な文化的財物 (客体化された文化資本)、学校制度やさまざまな試験によって賦与された学歴・資格など (制度化された文化資本)、以上の三種類に分けられる」⁽¹⁶⁾。

まずここでは護符、その中でもプラ・クルアン (Phra Khruang 小仏像) やワトゥ・モンコンに属するとされる、僧侶によって聖化される、プロテクティブな機能を持つもの或いは幸運をもたらすものについて考えていく。まずワトゥ・モンコンは聖界と俗界を結ぶ交換財であるといえよう。つまり、聖界から俗界へは護符が賦与さ

れる。ここでは護符はタイの社会的なコンテキストで単なる物質以上のものと認知されている宗教資本であるといえよう。つまり、ブルデューの主張する「客体化された文化資本」であるといえるのではないだろうか。護符の内には僧侶、即ち聖界の権威の表象であるのだが、その力であり、護符の力の源であるサクシット (sakṣit 聖性) が込められている。護符を所有する持ち主は護符を所有することで上座部仏教の庇護を得ることが出来るのである。即ち護符はサーサナ (sasana 宗教) の権威を表象する宗教的文化資本なのである。

一方、俗界から聖界へも護符という交換財を媒介として交流がある。それは聖界から俗界への流れは護符のプロテクティブな力、或いは幸運をもたらす力という精神的な不可視的なものであったのに対し、俗界から聖界へは護符の授与、或いはそれに表象される効能、ご利益といった聖界側からのサーヴィスに対して支払われる対価という経済的な流れが見えてこよう。しかしこれは物質或いは単なる世俗内でのサーヴィスとそれに対して支払われる対価という関係ではない。何故ならば、『プラ・クルアン Phra Krueng』の様な雑誌では護符の価格を「ブーカー (rakha 価格)」といわずに「ブーチャー buuchaa」という語、即ち、辞書では「祭る、祭祀する、礼拝する」といったように書かれている語で言い換えているためである。換言すれば日本語の「御供養料」に該当するであろう。このことは本来経済的な交換システムはお金を媒体として売手と買い手がそれぞれ対等な関係で即ち horizontal な関係で位置付けられるの

に対して、タイ社会の護符が媒体とした交換システムは、聖界と俗界の order を平準化するものではないということを示している。即ちここでは上座部仏教はたとえその組織が檀家たちによる喜捨で支えられているにも拘らず、俗界よりも上位に位置するのである。そして護符をめぐる俗界と聖界のやりとりも「ブーチャー」という語にもあらわれているように聖界上位の vertical な関係に終始しているのである。このことは前述してきたように護符が単なる財ではなく宗教的文化資本なのであり、上座部仏教の聖性、権威を伝達する媒介 (vehicle) という性格に留意しなければならないであろう。

ここで媒介を medium という語を用いずに vehicle という語を用いたのは前者では静的なイメージであり護符の流通性 (聖俗間、俗界内での流通市場の両方を含む) を強調できないからである。というのは護符に込められたサクシットは護符それ自身が携帯可能で移動可能なものであるだけでなく、護符の所有者にその力を与え得るという点も考慮する必要があるからである。

そして同時に護符は同じ上座部仏教圏であるミャンマーでは認められていない僧侶による俗界へのサーヴィスの一つといえるのではないだろうか。つまり、大衆のニーズに応える形でタイでは僧侶がナムモン (nam mon 聖水) を会衆に振りかけたり、護符を通じて大衆にサーヴィスを行なっているのである。ここでは仏教権威がその利潤 (この場合ブン Pun 徳) を俗界に還元する一手段として護符を用いているのではなからうか。宗教的文化資本としての護符は大衆がそれに支払うお金の見返りとして仏教権威の可視的な力とさ

れる僧侶のサクシットを伝達しているのだから。

III-2 俗界における宗教的文化資本

前節では聖界と俗界という垂直な関係におけるワトゥ・モンコンの果たす役割をみてきた。この節では護符が俗界内という水平関係でどのように活用されているかみていきたい。

護符の崇拜者が聖界から得た宗教的文化資本であるワトゥ・モンコンは、獲得されてそのまま単にそのプロテクティブな力や幸運をもたらす力を愛でられて終わるのではない。それだけならば護符へのカルトといえるほどの現象は起きず単なる上座部仏教内の一民間信仰としかみることには出来ないであろう。そうではなく、宗教的文化資本としての護符は資本であるので、俗界内つまり我々の住む社会で更に生産するために利用されるのである。タイ社会の場合その生産されるものは何かといえば、これもブルデューの概念である、「ディスタンクシオン（卓越化）distinction」であろう。有名で力のある護符を所有していることは俗界におけるディスタンクシオンの獲得をも意味するために人々は護符を求めめるのではなからうか。ワトゥ・モンコンは「護符」という観点だけでは単なる宗教的な呪物でしかないが、ディスタンクシオンという概念を援用することで護符としての効力だけではなく俗界内での護符を超えた効力の存在に気付くことができるのである。

ディスタンクシオンとは日本語では「卓越化」というのが基本的な訳になっているのだが、他者からの区別を得ることである。しか

もディスタンクシオンは外部から賦与されるような受動的なものではなく自分から区別、卓越性を示すというような能動的且つ戦略的な概念なのである。高名な僧侶によって聖化された護符を所有している持ち主はその護符のいわれや如何にして手に入れたのかといったことを得々として話すのである。このことは護符が古く高名であればあるほど偽物が市場において跳梁跋扈している現実を考えると、持ち主の護符鑑定が目利きといった卓越性が護符に現われているといえよう。即ち、以下のように持ち主は戦略的に自分のディスタンクシオンを主張しているのである。

「ことさらに専門的で、古風で、神秘めかした能書きをうまく操りながら、その場その場で黙って喜びに浸れば良いという単に無防備で受動的な消費の仕方から、その道に通じた者の味わいかたというものを区別することによって、通人は自分が物質的に獲得する手段をもっている希少な財を象徴的に所有化するのにふさわしい人間なのだということを主張する」。(傍点ママ)^①

即ち、有効な効力を持つ高名なワトゥ・モンコンを所有するものは、その護符を購い得る経済力或いはブルデューが云うところの「社会関係資本（capital social）」を有するだけではなくその護符を所有するのに相応しい護符に対する知識を持ち合わせている必要がある。即ちワトゥ・モンコン、とりわけ高価なブラ・クルアンという宗教的文化資本の所有者はディスタンクシオンを獲得すると同時に

「象徴的強制効果」を強いられるのである。象徴的強制効果とは、ブルデューの場合は学歴資本に関して用いられている語であり、ある学歴の持ち主に、それに相応しい教養を身につけることを暗黙のうち強いてくるような効果をさすのである。タイ社会の護符信仰崇拝者の間では象徴的強制効果は学歴ではなくワトウ・モンコンへの知識を強要する。ここでは、護符信仰の世界に入ろうとするものはブルデューのいうように「賭け金」として護符に対する「教養、知識」を賭け、その「報酬」として、ワトウ・モンコンから経済的、社会関係的な「利益」を獲得する。ここでは護符専門誌に載っている、ある護符収集家へのインタビューをみてみたい。

「昔は私はブラを配るのが好きで、たくさん配った。ワット・パークナム (Wat Paiknam)、ブラ・クルアン(一種)などは1000体あった。でも全部配った。当時はもったいなくなかった。当時の価格は1200バーツ(邦貨で約4200円)。1000ならあげてもいい価格だった。誰か来たら、警察官、判事が引越してきて私にブラが欲しいと言ってきたらブラを持っていったものさ。後でやってきた人にブラを見せてやると、どうして君はこれだけしかブラを残しておかなかったんだとこぼすんだ。」(括弧内引用者補足)^⑧

この収集家は、ワット・パークナムというブラ・クルアンを媒体として、ビジネスをするうえでタイ社会では重要な警察や法曹界の

人々とのコネクションを築いており、護符が単なる宗教財としてだけではなく社会関係を築く資本(賭け金)となっていることがわかる。つまり護符本来の効力を超えて、ビジネスのための資本として護符が捉えられていよう。さらに護符に奇蹟譚が付加することで護符の効力とその市場での価格が増加する。奇蹟譚が護符の効力の一要素であることはタンバイアも述べている通りである。^⑨この奇蹟譚の流布にはマスメディアが大きな役割を果たしていることは言うまでもないであろう。なかでもブラ・クルアンに関する専門誌にはそのような証拠とされる記事が枚挙に暇が無い。^⑩人々はこのような情報を得ることで護符への崇拝を更に高め同時に護符の市場における価値が高まるのである。何故ならばそのような情報を得ることで人々は護符を手に入れる際に効力があるという言説が付随しているものとあまりそのような言説が付随していないものとは前者を欲しがるために需要と供給の市場メカニズムからその市場における価格は上がるからである。そして本来護符の所有者はその人物自体としては単なる物質によってディスタンスオンが変化することはない。しかし護符という物質がタイ社会においては戦略的な意味付けをもっているために、高名な護符の所有者は「ワトウ・モンコン何々の所有者」として言及されることによりその社会におけるディスタンスオンが上昇するのである。^⑪これはブルデューの主張する「参照の戯れ効果」と呼ばれるものが効果的に作用しているといえよう。以下に少々長いがその効果がどういったものであるかを理解し易くするために引用したいと思う。

「しかし、ミサ執行司祭〔ある作品を賞賛しまつりあげる者〕や信者〔それに従って作品を信奉する者〕の意図は理解することなどではないし、また芸術作品崇拜の日常的ルーティンにおいては、教養的なものであれ世間的なものであれ、参照の戯れがもっている機能は作品を相互正統化の循環構造のなかにはいらせることにほかならない。たとえばピロードのブリュールと言われるヤン・ブリュールゲルの『花束』を暗示することによってジャン・ミシェル・ピカールの『オウムのいる花束』の価値は高まるが、それと同時に別のコンテキストでは、後者に言及することが、一般にこちらのほうが馴染みが薄いだけに逆に前者の価値を高くするといった具合である。この教養に裏打ちされた他作品への暗示と、限りなく次々と他の類推へと差し向けてゆく類推（それらは神話体系や儀式体系の主要な対立関係と同様に、自らの行なう関係づけの根拠を明白にすることによって自己正当化する必要がまったくないものである）の戯れは、互いに照応し強めあうさまざまな疑似体験の、目のつまった網を作品のまわりに張りめぐらせる。そしてこの網が芸術観想の魅惑をなすものである。それはブルーストの言う『偶像崇拜』のまさに根源にあるものであり、『女優の衣装のひだや社交界の婦人のドレスを（…）、布地が美しいからではなく、それがモローによって描かれたりバルザックによって描写されたりした布地だから』こそ美しいと思う気持ちにさせるものなのだ。」（下線部引用者）²⁾

従って、護符の所有者は自らが所有する護符と同種類の護符の奇

蹟譚に言及することで自分の護符も同様の力があるということを中心張ることができるであり、同時にその価値が高まっているのである。このコンテキストにおいては同時に二段階の「参照の戯れ効果」が起きていることに注意する必要があるだろう。即ち第一の段階では他人の護符の奇蹟譚による自分の同種類の護符の価値の上昇である（その効能とその護符交換市場における取引価格の両方）。そして第二段階は自分の護符の価値が上昇してことで自らの卓越性、ディスタンクシオンが上昇する点である。

このように聖界から授与された宗教的文化資本としてのワトゥ・モンコンは資本となることで俗界内で更にその自らの護符の機能的な価値を上昇させることは勿論、その持ち主のディスタンクシオンをも上昇させ得るのである。

IV まとめ

以上みてきたようにタイ社会においてはワトゥ・モンコンは二段階の効力を有する。すなわち、一、護符として、二、ディスタンクシオン伝達手段として。

まず護符としての効力は、その原料、また護符の聖化儀礼のプロセスから顕れる。そして、これらは俗界に対して、ヒエラルキカルに絶対的に上位に立つ上座部仏教という聖界から下げ渡された「聖性」を表象している。そして俗界に下げ渡されたワトゥ・モンコンは護符崇拜者の間を流通するに従って、「聖性」を核として、言い

換えれば「文化資本」として所持者の「ディスタンスション」を創りだすのである。このように、俗界、或いは消費社会では、本来、ワトウ・モンコンの機能としては意図されていなかった効用である、ディスタンスションが、ワトウ・モンコンが護符であるゆえに、効用として表層に顕現しているのである。(8)

注

- (1) ラマ五世(チュラロンコーン大王)(在位1868~1910)は近代タイ建国の父とされ切手だけでなくラマ五世在位当時の肖像入りのコイン、リアン(ワトウ・モンコンとしてのメダル)等が崇拜されただけで一つのカルトが成立している。ラマ五世カルトは八〇年代の経済成長の頃からとりわけ顕著になったと考えられており、都市の中小店主や証券ブローカーといった経済成長の恩恵を受けた新興中産階級(「主としてバンコク」に商業の神として崇拜されている。ラマ五世の誕生した曜日の木曜には国会議事堂前のラマ五世像には同国王の好物だったブランドデーが奉納されていた。
- (2) Terwiel, B. J., *Monks and Magic An Analysis of Religious Ceremonies in central Thailand*, London and Malmö, Curzon Press, 1979, p.74.
- (3) Tambiah, S. J., *The Buddhist saints of the forest and the cult of amulets*, Cambridge University Press, 1984, p.243.
- (4) Terwiel, B. J., op. cit., p.80.
- (5) Tambiah, S. J., op. cit., p.244ff.
以下この節で括弧で引用されているときは特に断りのない際はタンバイアのこの箇所からの引用である。
- (6) チュラロンコーン大学成人教育センター、『タイ文化の魅力 歴史美術、建築、他 観光ガイドの手引き』、チュラロンコーン大学、1992, p.293f.
- (7) 筆者の聞き取り調査でのインタビューメントによる。
- (8) Tambiah, S. J., op. cit., p.245f.
- (9) Tambiah, S. J., "The Magical Power of Words" in *Culture, Thought, And Social Action*, Harvard University Press, 1985, p.17.
- (10) *Ibid.*, p.22f.
- (11) 青木保『儀礼の象徴性』、岩波書店、1984, p.245.
- (12) Tambiah, S. J., loc. cit.
- (13) モース・M.『有地享 伊藤昌司、山口俊夫共訳』、『呪術の一般理論の素描』、『社会学と人類学』、弘文堂、1973, p.103.
- (14) 同書、p.106.
- (15) Rodpwanghpha, Itthi (pseud.), "Phra somdet Wat Rakhang Chakraphat Phrakrueng thi tuk than thai than" ("皆ぞん檀れのプラ・クルアンの帝王、プラ・ソムテット・ワットラクハン) in *Putakhan* (『仏陀の徳』) February, 1996, Newnaa Book, Bangkok, 1996, p.26.
- (16) フルチュー・ビエール、石井洋次郎訳、『「ディスタンスション」Vol.I』藤原書店、1990, p.V.
- (17) 同書、Vol.II、p.38f.
- (18) *Precious*, Vol.3, July, 1995, Precious Magazine Co.Ltd., 1995, p.103.
- (19) ワトウ・モンコンと奇跡譚についての議論は石高、『タイ社会の護符信仰—ワトウ・モンコン入門』、『南方文化』第二十四輯、1997, pp.163~178を参照のこと。

(20) これらの護符収集家向けの雑誌は趨勢が激しいので明言できないが筆者が数えたかぎりでは二二種類あった。

(21) *Ibid.*, p.99~p.105.

(22) ブルデュー、ピエール、前掲書 Vol.1, p.82.

(23) 本稿は平成七年度提出の修士論文の三、四章に一九九五年八月から一九九七年三月までにタイ国で行なった現地調査で得た資料を加え、加筆、訂正したものである。

参考文献

青木保、一九八四、『儀礼の象徴性』、岩波書店。

石高真吾、一九九七、「タイ社会の護符信仰ーワトウ・モンコン入門」、『南方文化』第二十四輯。

チュラロンコン大学成人教育センター、一九九二、『タイ文化の魅力 歴史美術、建築、他 観光ガイドの手引き』、チュラロンコン大学、パノック。

ブルデュー、ピエール、一九九〇、『ティスタンクシオン』vol.1~II、藤原書店。

モース・M、有地亨、伊藤昌司、山口俊雄共訳、一九七三、「呪術の一般理論の素描」、『社会学と人類学』、弘文堂。

Precious Vol.3, July, 1995, Bangkok, Precious Magazine Co.Ltd.

Rodpungphaa, Itthi (pseud.),

1996 "Phra sondet Wat Rakhang Chakraphat Phrakhrueang thii tuk than thai than" (「みなさん憧れのプラ・クルアンの帝王、プラ・ソムベット・ワットラカン」) in *Phutthakun* (『仏陀の徳』) February, 1996, Bangkok: Neawnaa Book.

Tambiah, S.J.,

1984 *The Buddhist Saints of the forest and the cult of amulets*, Cam-

bridge University Press.

1985 "The Magical Power of Words" in *Culture, Thought, and Social Action*, Harvard University Press.

Terwiel, B.J.,

1979 *Monks and Magic An Analysis of Religious Ceremonies in central Thailand*, London and Malmo: Curzon Press.

The Meaning of Amulets in Thai Society

Shingo ISHITAKA

In Thailand amulets named under the name of “Watuu Mongkhon” are highly worshipped regardless of class, age, and educational background. “Watuu” means material. “Mongkhon”, prosperity or happiness. This paper examines the efficacy of “Watuu Mongkhon” from two perspectives. First, from the religious rite’s points of view. Secondly, from the sociological points of view.

From the consecrational rite, efficacies of “Watuu Mongkhon” reconcile itself to “Saksit” or sacredness of the Buddha, ingredients of the relics of the reverend monks, and the Pali chanting during the consecration. After handing down to the lay society or “sold” to the consumption society in other words, “Watuu Mongkhon” becomes the “cultural capital” for acquiring the “distinction” of the beholder. And it brings the worshipper “Mongkhon” as faithful to its meaning in Thai. It is not only a material but which conveys the holiness of the Buddhism by nature. That is the reason why the worshipper look for the “most effective” ones and among the worshipper so many discourses on their miracles and prosperities brought to the beholders are interwoven.

Key Words

Thailand
amulets
P.Bourdieu
Cultural Capital
Distinction